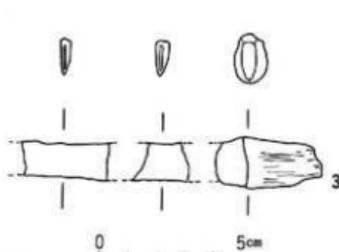
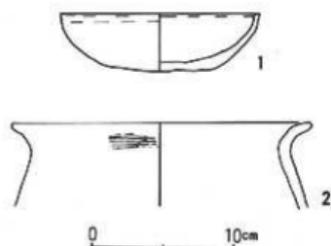


C-17号穴実測図



C-17号穴出土遺物



C-17号穴出土遺物実測図

C-17号穴出土遺物観察表

器 号	取り上 げ番号	器 名	寸 法 (cm)				胎 土	製 成	色 調	備 考	タイ プ
			口径	胴 径	底径	器高					
1	No. 73	环	13.7			4.1	密	良好	灰 色	外面一底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部部転ナゲ 内面一底部静止ナゲ、上部部転ナゲ 口縁部はややくびれて直立する。	N B
2	No. 49	甕	指定 20.0				"	"	灰 色	外面一胴部に横ナゲ、その他不明 内面一不明 土製器	
3	No. 74	刀子								前縁床面から出上。刃部および某の一部を欠い、 残された部分の長さは7.9cm、基に木質が残っ ている。	

## C-18号穴

位置は、C-16号穴の東隣りです。玄室はつくりもていねいで、特に天井の棟までの高さが高く立派な横穴です。副葬品も耳環のほかに土器類が豊富で、須恵器屍床まで設けてあります。入口の閉塞方法も比較的大きい石を多数集めて積み上げています。南東部つまり谷の奥部の範囲では一番優れた横穴です。被葬者の全体に占める地位を示すようです。

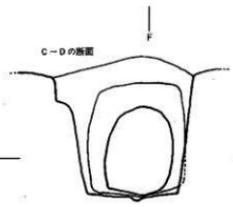
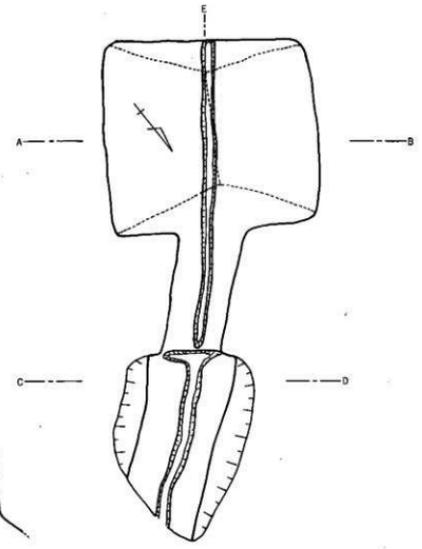
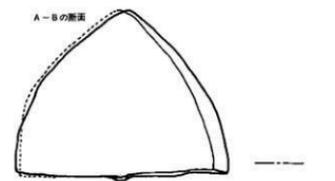
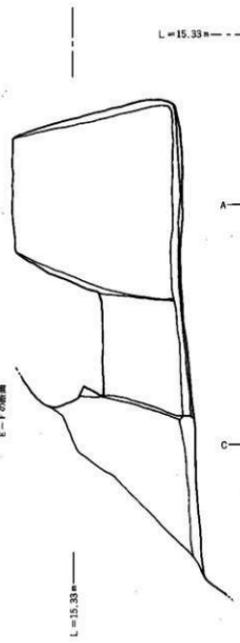
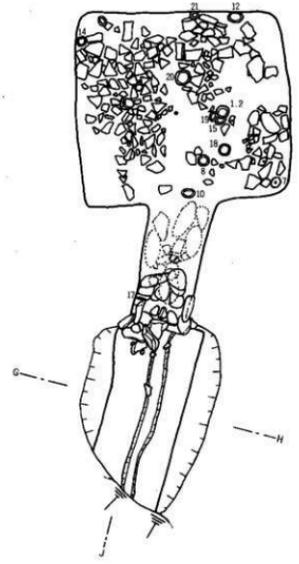
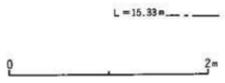
須恵器屍床は左右2つあるように見えますが、床面からの高さから言えば3つに分かれます。左屍床は床面の真上からせいぜい3~4センチ上。右屍床のうち排水溝に近い部分は、床面から3~5センチ上。右屍床の右壁に近い範囲は床面から8~15センチも上に敷かれています。このことから3回以上の葬儀がなされたことがわかります。また須恵器片は玄室だけでなく羨道全体にまで延びており、扉石の間にも分布しています。(羨道にまで遺体を安置したとは考えられません。扉石もおかれていますから。)

何度か追葬されたことはそれ以外の点からもうなずけます。それは前庭部に、元々玄室内須恵器屍床に用いられていた須恵器片が散乱していること。(追葬の時、中から掃き出された。)羨門の床面に置かれた最下段の扉石3個のその上に須恵器片が敷きつめられ、さらにその上に2段目の石を積み上げていることです。(以前使用された扉石を掘り返さずに、その上に須恵器片を敷いている。)なお須恵器片を接合していったら、C-12号穴、C-13号穴のよりさらに大きい大甕(高さ約106センチ、胴部最大径約85センチ)と甕(高さ約26センチ)の2個体がほぼ完全にでき上がりました。

須恵器の型式から、この横穴は7世紀前半から半ば、そして後半まで相当長期間使われていたことがわかります。



1. 湖山小ブロッコ岩混じり茶褐色土
2. 湖山湖山ブロッコ岩混じり茶褐色粘質土
3. 茶褐色粘土



C-18号穴実測図



とびらいし じょうきょう  
1 扉石の状況



せんどう げんしつない じょうきょう  
2 羨道から見た玄室内の状況  
(床面には須恵器屍床)



すゑき ししう じょうきょう  
3 須恵器屍床の状況  
(玄室奥壁から右屍床を見たところ)

C-18号穴観察表

(単位: m)

支室	標高 (床面)	平均 15.15	奥行	1.90	奥幅	1.95	前幅	2.04	最大幅	2.14	高さ	1.65
	平面形	正方形			天井 の形態	テント形			型式	妻入り		
	埋葬 施設	左側	須恵器屍床			右側	須恵器屍床			奥		
羨道	長さ	1.20	奥幅	0.65	前幅	0.60	高さ	0.85	横断面の形	楕円形		
閉塞施設	石材	自然石65個(ほとんどが海石。地山石も少々あり)を粘土で固めて積み上げている。								横込有無	無	
前庭部	長さ	1.80				幅			0.75			
排水溝	支室奥壁中央から羨門に至り、前庭先端まで続く。羨門付近ではT字形になる。											
その他	羨道と前庭は支室の中軸線から左へ約15度ずれている。須恵器屍床の高さが異なる。(3通り)須恵器片は支室だけでなく、羨道全体にまで敷かれている。羨門と前庭の間にわずかな段差がある。											

## 遺物出土位置

支室	杯蓋9個(このうち1個は須恵器屍床に用いられていた破片を接合して復元したもの) 杯身9個(このうち2個は須恵器屍床に用いられた破片を接合して復元したもの) 小形壺1個、横瓶1個、須恵器屍床の破片から接合し復元した甕1個と大甕1個、耳環1個
羨道	杯身1個、杯蓋1個
前庭	須恵器片(須恵器屍床に用いられていたもの)
その他	

## 築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期 (7世紀前半)	須恵器型式	N期(A・B-1・ B-2・C・E)	追葬有無	有	人骨有無	無
備考							

## C-18号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法(cm)				胎土	肌成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
1	No. 121	杯蓋	12.1			4.4	密 細砂を含む	良好	灰色	外面-天井部ヘラ切り後ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ 外縁体部にヘラ記号「X」あり。	VA
2	No. 123	"	10.6			3.8	"	"	"	外面-天井部ヘラ切り後ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ 外面天井部にヘラ記号あり。	VB I
3	No. 120 No. 47	"	10.5			3.9	"	"	"	外面-天井部ヘラ切り後ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ 破片にして須恵器屍床の一部として使用している。	VB I
4	No. 47	"	推定 10.9			推定 4.0	"	"	淡灰色	外面-天井部ヘラ切り後ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ 15とセットになる。	VB I

番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				器高	土質	築成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高						
5	No. 129	環蓋	推定 11.7			3.8	密 細砂を含む	良好	灰 色	外面—天井部ヘラ切り後ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面—天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N B 1	
6	901031 黄道	"	推定 10.4			4.2	"	"	黒 灰 色	外面—天井部ヘラ切り後ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面—天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ 外面に自然物付着、17とセットになる。	N B 2	
7	No. 153	"	9.5			1.9	"	"	"	外面—天井部ヘラ切り後回転ヘラ削り、下部回転ナゲ 内面—回転ナゲ 外面天井部に乳頭状つまみをもつ。縁部内面には「かえり」がつく。18とセットになる。	N C	
8	No. 128	"	9.5			1.9	"	"	灰 色	外面—天井部ヘラ切り後ヘラ削り、下部回転ナゲ 内面—回転ナゲ 外面天井部に乳頭状つまみをもつ。縁部内面には「かえり」がつく。19とセットになる。	N C	
9	No. 47	"	推定 10.3			1.5	"	"	"	外面—天井部ヘラ切り後ヘラ削り、下部回転ナゲ 内面—下部回転ナゲ 外面天井部に乳頭状つまみをもつ。縁部内面には「かえり」がつく。	N C	
10	No. 130	"	15.1			2.7	"	"	暗 青 色	外面—天井部回転ヘラ削り、下部回転ナゲ 内面—天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ 「輪状つまみ」をもち、縁部内面には「かえり」がつく。20とセットになる。	N E	
11	No. 138 No. 134	環身	12.2	(受部) 10.1		3.6	"	"	灰 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ 内面底部にヘラ記号あり。外面底部に自然物あり。破片にして須磨器民芸に利用	N A	
12	No. 117	"	12.3	(受部) 10.2		4.0	"	"	黄 灰 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ	N A	
13	No. 46 B 4	"	推定 13.2	(受部) 10.9		4.4	"	"	淡 灰 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—回転ナゲ	N A	
14	No. 119	"	10.8	(受部) 9.1		3.3	"	"	暗 青 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ	N B 1	
15	No. 124	"	11.4	(受部) 9.3		3.5	"	不良	黄 褐 色 灰 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ 4とセットになる。	N B 1	
16	B 13 901029	"	推定 11.4	推 定 (受部) 9.6		3.1	"	良好	灰 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—上部回転ナゲ	N B 1	
17	No. 132	"	10.2	(受部) 8.3		3.3	"	"	黄 灰 色 灰 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—回転ナゲ 外面に自然物付着。6とセットになる。	N B 2	
18	No. 127	"	8.6			3.1	"	"	暗 青 色	外面—底部ヘラ切り後ナゲ調整、底縁周辺は回転ヘラ削り、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ 7とセットになる。	N C	
19	No. 122	"	9.3			3.1	"	"	"	外面—底部ヘラ切り後回転ヘラ削り、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ 8とセットになる。	N C	

番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
20	No. 125	坏身					密 細砂を含む	良好	暗青色	外面—底部静止糸切り、上部回転ナデ 内面—底部静止ナデ、上部回転ナデ 高台がつく。10とセツトになる。	N B
21	No. 118	小形壺 (埴)	8.3	7.2	5.3	4.6	"	"	灰色	外面—底部ヘラ切り、底部周辺回転ヘラ削り、 上部回転ナデ 内面—回転ナデ	
22		壺	18.5	28.6		26.1	密	"	黄灰色	外面—平行タタキ、頸部以上は回転ナデ、肩部 以下にコキ目 内面—青濁状文のタタキ、頸部以上は回転ナデ 外面全体と内面頸部以上に自然釉付着。破砕し て文室の尻床に使用	
23		横瓶		推定 38.1			"	"	灰色	外面—頸部のみ回転ナデ、体部は平行タタキの 後コキ目状調整 内面—頸部回転ナデ、体部は弧状タタキ、(頸 部は静止ナデによって滑されている) 破砕して文室の尻床に使用	
24		大甕	推定 52.2	推定 84.8		推定 108.0	"	"	"	外面—口縁部から頸部にかけて回転ナデ、体部 は平行タタキ 内面—口縁部から頸部は回転ナデ、体部は弧状タ タキ	
25		耳罎	口径 2.3	口径 2.2	高さ 0.8					きわめて保存状態の悪い金罎	
26		"			高さ 0.5					保存状態が悪く、金罎か蓋罎か不明	

こうこがくきぞくしき  
考古学豆知識

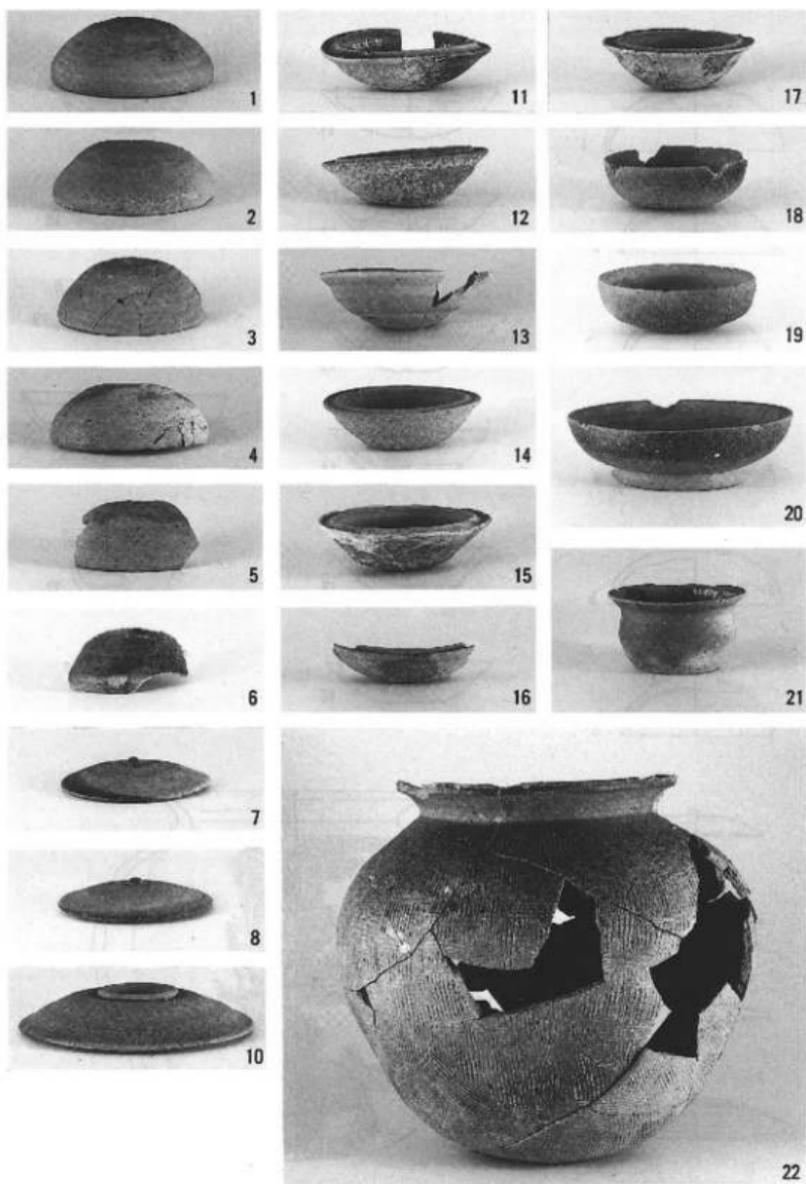
№4

おおがめ  
ジャンボな大甕

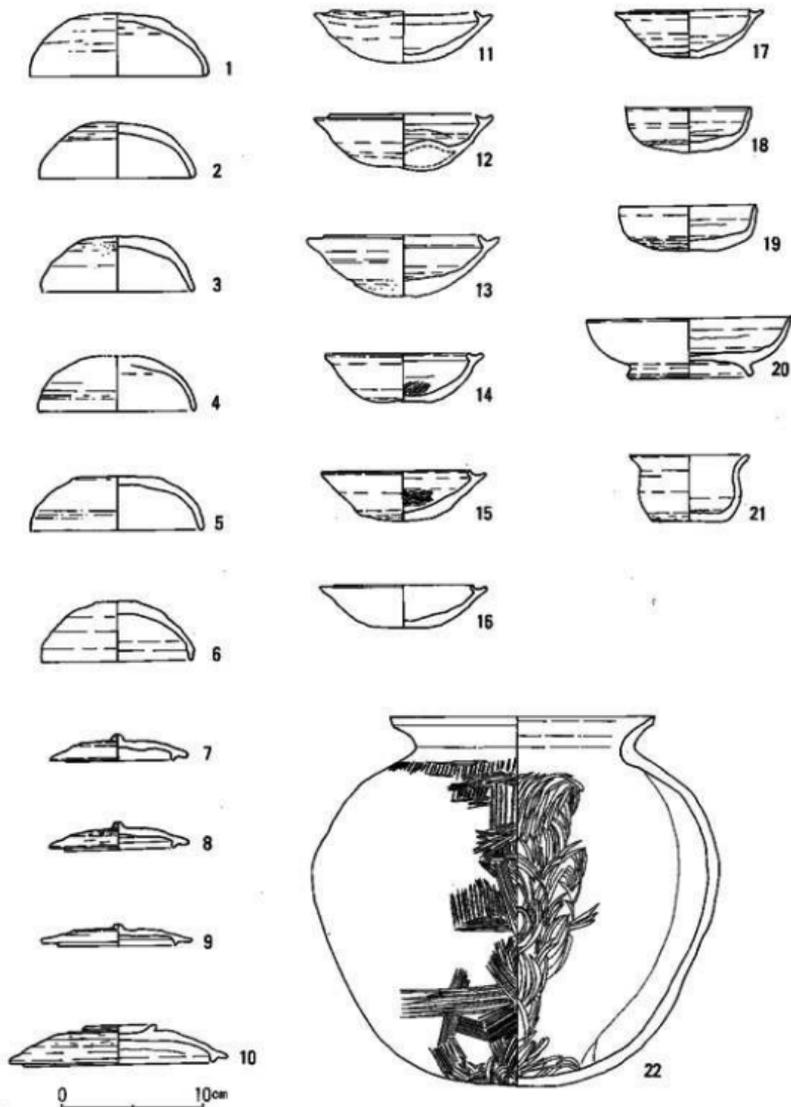
おおがめ  
大甕



高さ1メートルもある大甕。持ち運びも大変だったでしょうが、一体何に使っていたのでしょうか。酒づくり、いや、米の貯蔵。中に何をいれていたのか興味をそそられます。また、今の松江市の中海北岸で作られたあと海上を船で大甕まで運んだのかもかもしれません。



C-18号穴出土遺物 No.1



C-18号穴出土遺物実測図 No.1



24

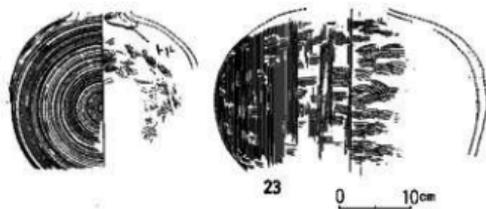
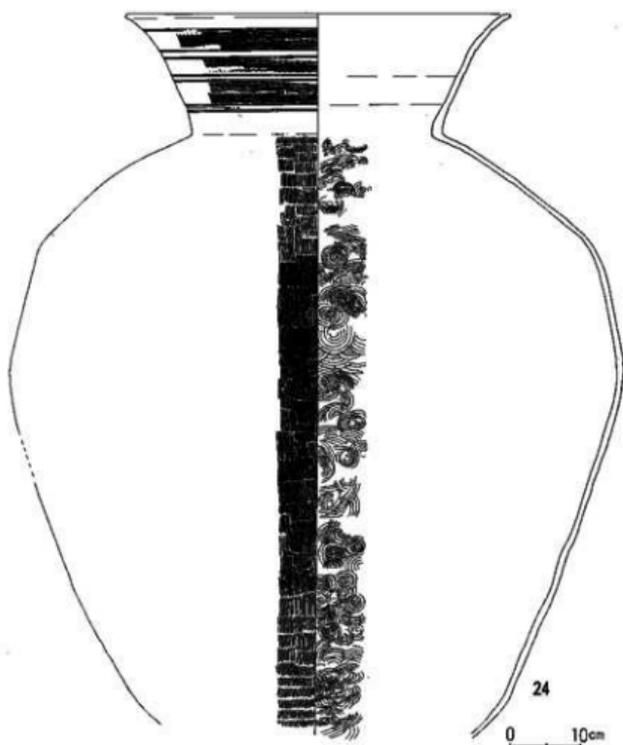


25



26

C-18号穴出土遺物 No.2



0 5cm

C-18号穴出土遺物実測図 No.2

## C-19号穴

今回の調査区域の南部つまり谷の奥部に位置します。この辺りから南に向かって山の斜面の岩質が変化して、もろくなっています。そのためでしょうか玄室と羨道の天井部はもちろん、両側の壁までほとんど落ちていました。発掘調査中にも岩肌が落ちてきました。

その地山のせいででしょうか、この横穴の玄室の平面形はいびつです。左奥の角の部分はきちんと掘ってありません。右奥の床面に小さな浅い穴が6つ見つかりましたが、何の目的で掘ったのかよくわかりません。棺台と関係するかもしれませんが。形式分類すると、少しだれた便化家形になります。

入口の扉石の上部はこわれており、中は荒されております。前庭と玄室から同じ時期のタイプ(NB-1型)の土器が出ていますから、少なくとも7世紀前半に使われたことは確かです。

C-19号穴観察表

(単位:m)

玄室	深高 (床面)	平均	奥行	2.60	奥幅	2.30	前幅	2.30	最大幅	2.30	高さ	不明
	平面形	いびつな長方形			天井 の形	便化家形			型式	妻入り		
	埋葬 施設	左側		右側	棺台のように一段 高くなっている。			奥				
羨道	長さ	1.60	奥幅	0.94	前幅	0.88	高さ	不明	横断面の形   底面はU字形			
閉塞施設	石材	自然石を積み上げている。その上部はくずされてなくなっている。							縁込有無	無		
前庭部	長さ	2.10					幅	1.45				
排水溝	玄室の奥壁右半分と右壁沿いにのみ。											
その他	玄室右奥の床面に6か所のピット(小穴)が認められる。玄室と羨道の床面に各々1か所ずつ浅いくぼみがある。											

### 遺物出土位置

玄室	坏蓋1個
羨道	なし
前庭	坏蓋2個、有蓋壺1個
その他	

### 築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期 (7世紀前半)	須恵器型式	N期 (B-1)	追葬有無	不明	人骨有無	無
備考	玄室と羨道の天井全部と側壁の大半が落ちている。						

C-19号穴



1 C-19号穴羨道部の扉石の状況 (前庭から見る)

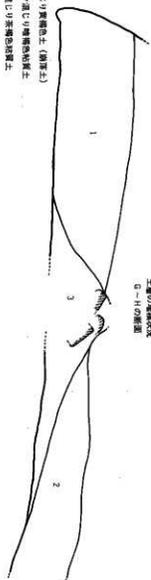


2 玄室床面の状況

3 中央がC-19号穴  
左下はC-20号穴、  
左上はC-23号穴、  
右どなりはC-17号穴、  
その右上はC-21号穴、  
その右下はC-14号穴



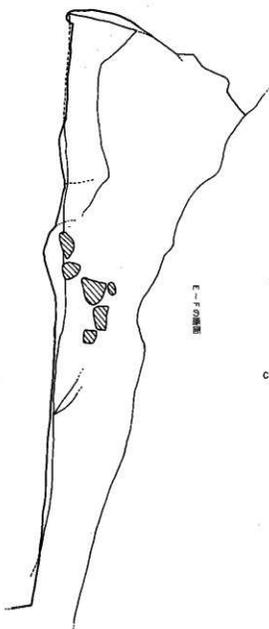
1. 堀山アノツツの掘り残りの黄褐色土 (黄褐色土)
2. 堀山黄褐色アノツツの掘り残りの黄褐色土
3. 堀山アノツツの掘り残りの黄褐色土



L=14.63m

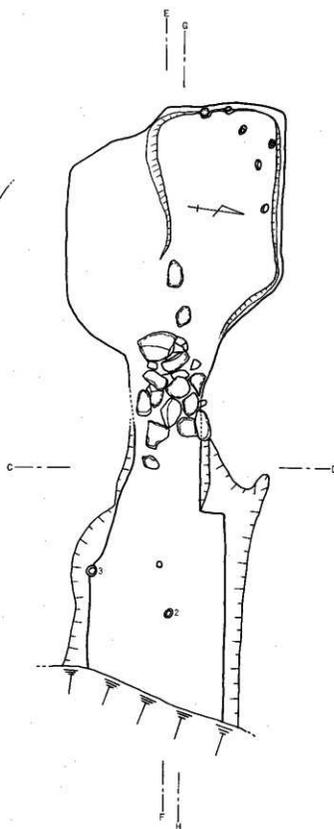
堀山の黄褐色土  
掘り残りの土

0 2m



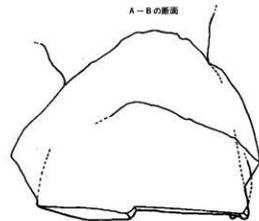
L=14.29m

E-Fの断面



C-Dの断面

L=14.29m



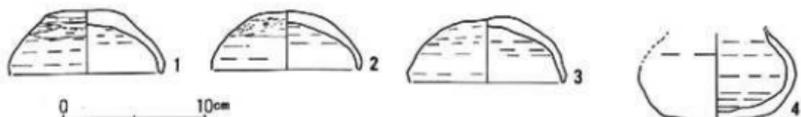
A-Bの断面

L=14.29m

C-19号穴実測図



C-19号穴出土遺物



C-19号穴出土遺物実測図

C-19号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口徑	胴径	底径	器高					
1	% 7	杯蓋	10.5			4.4	密 細砂を少量含む	良好	黄灰色	外面→底部ヘラ切り後天井部ナゲ調整、天井部周初回転ヘラ削り、下部回転ナゲ 内面→天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	B 1
2	% 14	"	10.1			4.1	"	"	"	外面→底部ヘラ切り後天井部ナゲ調整、天井部周初回転ヘラ削り、下部回転ナゲ 内面→天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	B 1
3	% 12	"	10.7			4.5	"	"	"	外面→底部ヘラ切り後天井部ナゲ調整、下部回転ナゲ 内面→天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	B 1
4	% 18	有蓋甕					"	"	暗青色	外面→底部ヘラ切り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面→回転ナゲ	

## C-20号穴

C-19号穴の玄室と接する形でつくられています。この横穴の最も大きな特徴は、玄室と羨道のつながり方です。玄室と羨道をつなぐと、ちょうど庖丁の形に見えます。これを考古学では「片袖式」と呼んでいます。ふつつ片袖式の横穴は珍しく特異なものです。宮尾横穴群の中でもこの形式はこのC-20号穴だけです。

どうして片袖式を採用したのでしょうか。一つ考えられる理由があります。それは玄室左壁から羨道左壁として前庭左壁に至る部分のもろい岩質にあります。当初は、羨道を掘った後、玄室の右袖のように左袖もひろげたかったのですが、あいにく左側の岩肌はボロボロと剝離するので、やむを得ず、真つすぐに奥壁に向かって掘ったのです。ですから、玄室中央の排水溝が左へ片寄った形になってしまいました。また羨道門から前庭にかけての閉塞石の状況を見てもうなずけます。石を小口積みあるいは横積みして扉石としていたのですが、やがてその左側の山肌がぐずれ落ち、すきまがあいたため、仕方なく大きな板状の石をそのすきまに立てて補充したのです。

次に玄室奥の床面にある小さな穴は規則的な並び方をしていますが、何のためなのかわかりません。

羨道の右側の壁はやわらかいため、調査中誤って掘りすぎてしまいました。

蓋環が出上していないため、細かな時期は指定できません。

C-20号穴観察表

(単位：m)

玄室	標高 (床面)	平均 13.10	奥行	1.98	奥幅	1.40	前幅	1.50	最大幅	1.52	高さ	不明
	平面形	長方形、片袖形			天井 の形態	便化家形			型式	妻入り		
	埋葬 施設	左側				右側				奥		
羨道	長さ	1.45	奥幅	0.72	前幅	0.78	高さ	不明	横断面の形	不明		
閉塞施設	石材	大小18個の自然石を積み上げて閉塞。							縁込有無	無		
前庭部	長さ	不明				幅	1.35					
排水溝	玄室奥壁から中央部まで。											
その他	前庭先端部は宅地造成のため削り取られている。玄室床面に浅い小穴(ピット)が3つある。											

- 1 C-20号穴を前から見た状況  
扉石の石の積み方や前庭左  
壁のくずれやすい地肌がよ  
くわかる。  
玄室の土器も見える。  
右後方はC-19号穴の玄室。

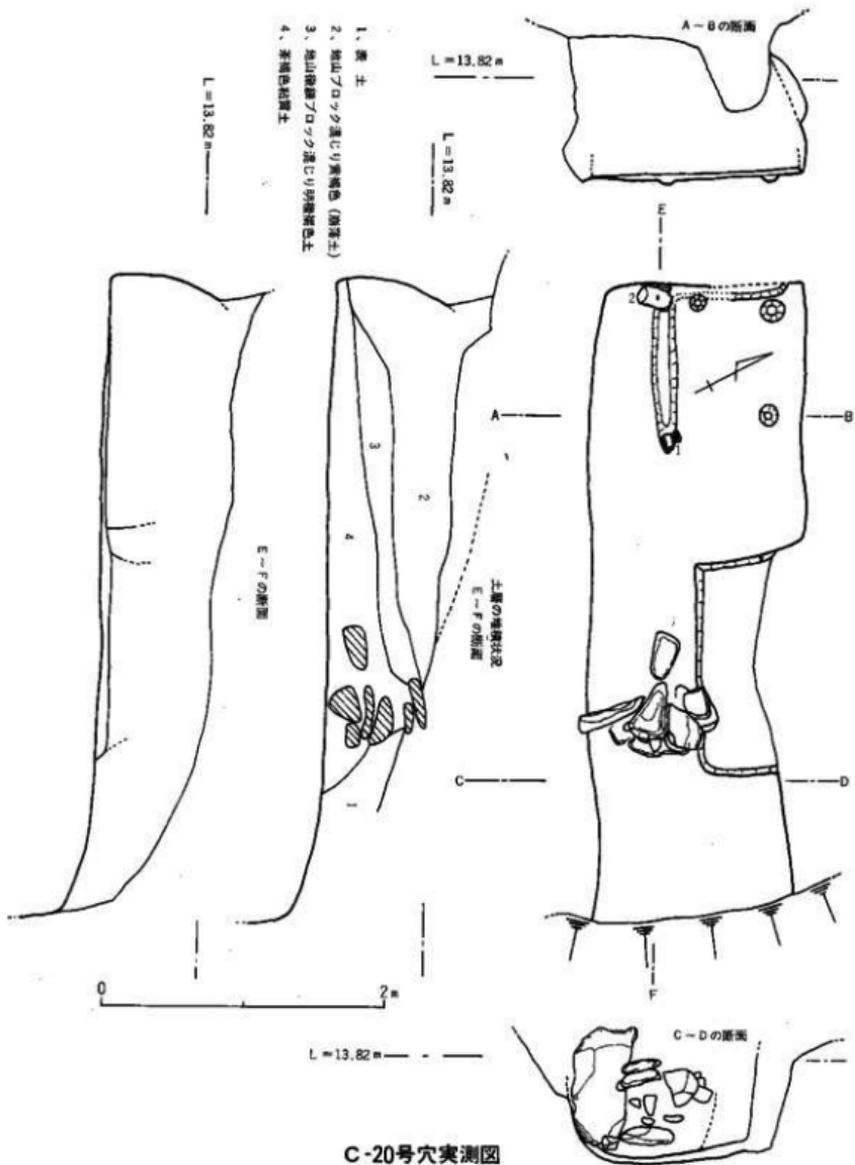


- 2 玄室内の状況  
(土器が2個出土)



- 3 上から見た玄室と甕道の床面  
(甕道の片方を掘りすぎたため  
わかりにくくなっているが、片袖式  
になっている)





- 1. 雑土
- 2. 雑山アロクシロシロ黄褐色(腐葉土)
- 3. 雑山黄褐色アロクシロシロ明褐色土
- 4. 赤褐色粘質土

L = 13.82 m

L = 13.82 m

L = 13.82 m

L = 13.82 m

C-20号穴実測図

遺物出土位置

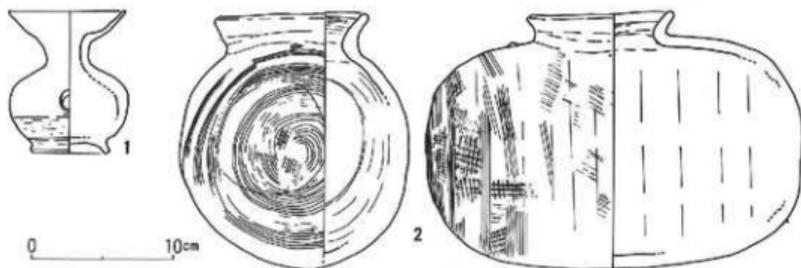
女 室	厩1個、横溝1個
羨 道	なし
前 庭	なし
その他	

築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期	須恵器型式	不明	追葬有無	不明	人骨有無	無
備 考	女室と羨道の天井と壁の大部分は落整している。羨道の右壁は発掘の際、削り過ぎた。						



C-20号穴出土遺物



C-20号穴出土遺物実測図

C-20号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
1	№ 45	甌	7.9	8.2	5.1	9.9	密 少量の細砂 を含む	良好	黄灰色	外面一隅から胴部にかけて回転ヘラ削り、上部 回転ナデ 内面一回転ナデ 高台がつく。高台の内面はナデ調整の後ヘラ記 号「寄」	
2	№ 48	甌	9.8	(英径) 28.5 (細径) 18.0		17.9	"	"	"	外面一頸部以上は回転ナデ、胴部は平行タタキ の後回転ナデ、片方のみカキ目 内面一回転部回転ナデ、頸部以下も回転ナデ 片側のみ弧状タタキ 外面の一部に自然熱付着。外面の両端に重ね焼 き痕がある。	

こうこがくまめちしき  
考古学豆知識

№5 — 古代の玉作りの方法 —



玉勾



(玉作りの方法)

今回の第2次調査では見つかり  
ませんでした。第1次調査では、  
宮尾横穴群からも<sup>玉がた</sup>玉などの玉類が  
出土しています。大ざっぱにその作  
り方は次のようです。

- ① 玉の原石を掘り出す。
- ② 原石をタガネのような道具で  
適当な大きさに割る (形割)
- ④ 砥石で磨き上げる。
- ⑤ キリのようなもので、ヒモ通  
し用の穴をあける。ただし、キリの  
先はとがっていないので、細かい砂  
の回転の助けを借りる。
- ⑥ 仕上げ。丸味と光沢を出す。  
木製の砥石を使うとツヤが出る。

## C-21号穴

C-17号穴の西北に位置する風変わりなミニサイズの横穴です。大きさが小さいばかりか玄室の平面は「イカ」に似た不定形をしています。天井のつくりもポピュラーではありません。土器などの副葬品は全くありません。盗掘されたわけではありません。自然石と粘土で完全に閉じてありましたから。

全体的に貧弱な印象をぬぐいきれません。扉石に使っている石にしても約3分の2しか丸い石（海石）を使わず、他は角ばった地山の石で補っています。

大きさ、形そして副葬品が欠けている点から、あるいはC-15号穴と同じように「小児用横穴」と考えたらどうでしょうか。

C-21号穴観察表

(単位：m)

玄室	標高 (床面)	平均	奥行	1.70	奥幅		前幅	1.52	最大幅	1.52	高さ	0.92
	平面形	不定形			天井 の形態	不定形			型式			
	埋葬 施設	左側				右側				奥	イ	
羨道	長さ	1.10	奥幅	0.80	前幅	0.65	高さ	0.58	横断面の形	丸味をおびた方形		
閉塞施設	石材	自然石34個で、「つめ土」をしながら完全に密閉している。							繰込有無	不明		
前庭部	長さ	不明					幅	不明				
排水溝	玄室中央から羨道、そして前庭まで。前庭先端は不明。											
その他	宅地造成のため消去され前庭の状態は不明。											

### 遺物出土位置

玄室	なし
羨道	なし
前庭	不明
その他	

### 築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期	須恵器型式	不明	追葬有無	不明	人骨有無	無
備考							



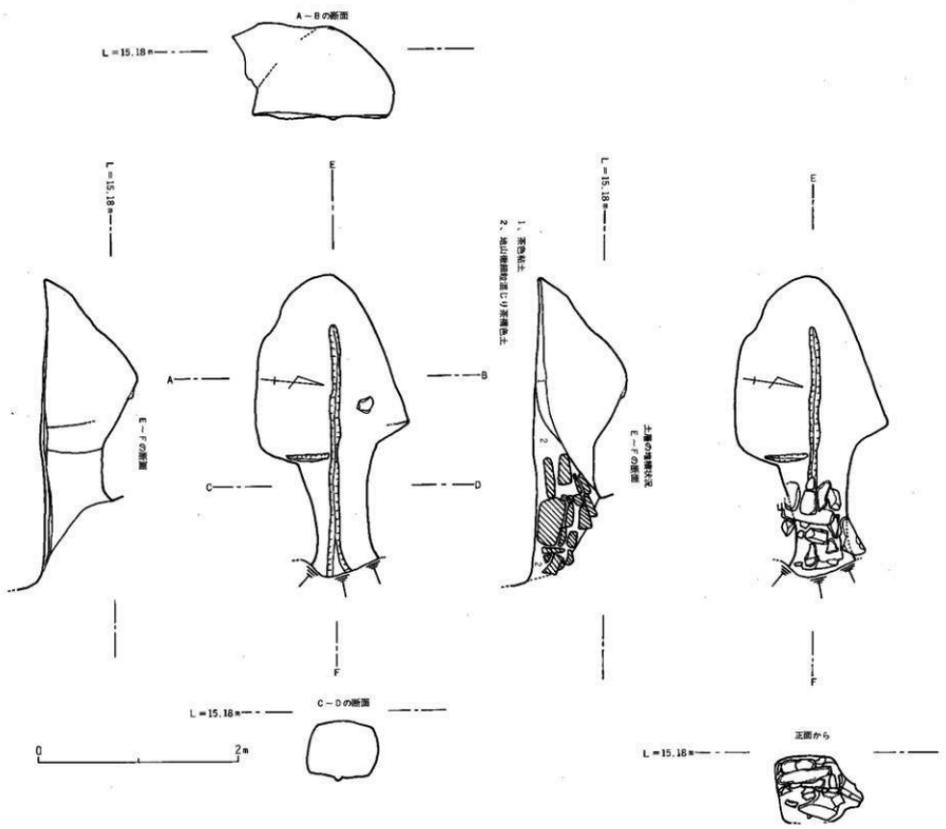
1 扉石の状況



2 C-21号穴を正面から見たところ。



3 左はしからC-22号穴、  
C-23号穴、C-20号穴。  
その下はC-17号穴。  
C-21号穴は右はし。



C-21号穴実測図

## C-22号穴

今回の調査区域の最も南のはずれに位置します。すでに述べましたようにC-19号より南は地川が大へんもろくなっており、いずれの横穴も天井が落盤しています。このC-22号穴の場合はその程度がさらにひどく、発掘中に玄室左側部分の山肌が次々に落ちてくるしまつ。危険なので玄室の平面形をはっきりさせないまま、やむなく中断しました。

右側部分から想像して、玄室の床面は台形になりそうです。羨道の扉石はとてもしっかりと積み上げられていました。羨道天井のくずれた部分を補うような形で積み上げていますから、おそらく後世の盗掘は受けなかったでしょう。

羨道に杯蓋と杯身が各1個副葬されていました。いずれも形式はN期F。宮尾横穴群出土品の中で最も新しいタイプになります。このC-22号穴とC-23号穴のわずかに二穴で見つかっています。これは7世紀もいよいよ終末の時期になります。ということは、この土器は古墳時代の最終時期に追葬された可能性があります。しかし、その追葬時より以前の副葬品が全く見当たりません。(破片の1個でも玄室や前庭から出土してもいいはずですが。) 扉石がしっかりしている点と合わせると追葬というよりむしろ、このNFの時期(奈良時代直前)にこの横穴が築造されたと考えた方がいいのではないのでしょうか。

いずれにしても宮尾横穴群の終わりの時期(一体いつ頃まで墓として使用されていたか)を示す資料になりました。

C-22号穴観察表

(単位: m)

玄室	椽高(床面)	平均 14.30	奥行	2.00	奥幅	不明	前幅	不明	最大幅	不明	高さ	不明
	平面形	台形(?)			天井の形態				扉式			
	埋葬施設	左側				右側				奥		
羨道	長さ	1.30	奥幅	1.00	前幅	0.58	高さ	不明	横断面の形	底面はU字形		
閉塞施設	石材	自然石(丸い海石ばかり)39個を積み上げ、ほぼ完全に閉じている。							横込有無	無		
前庭部	長さ	2.70					幅	0.80				
排水溝	玄室右壁から右袖にかけては細い溝。奥壁中央からは幅広い溝が少しわん曲しながら羨門までつづく。											
その他	羨門と前庭の間に段差がつく。前庭の奥半分は横断面が二段になる。											



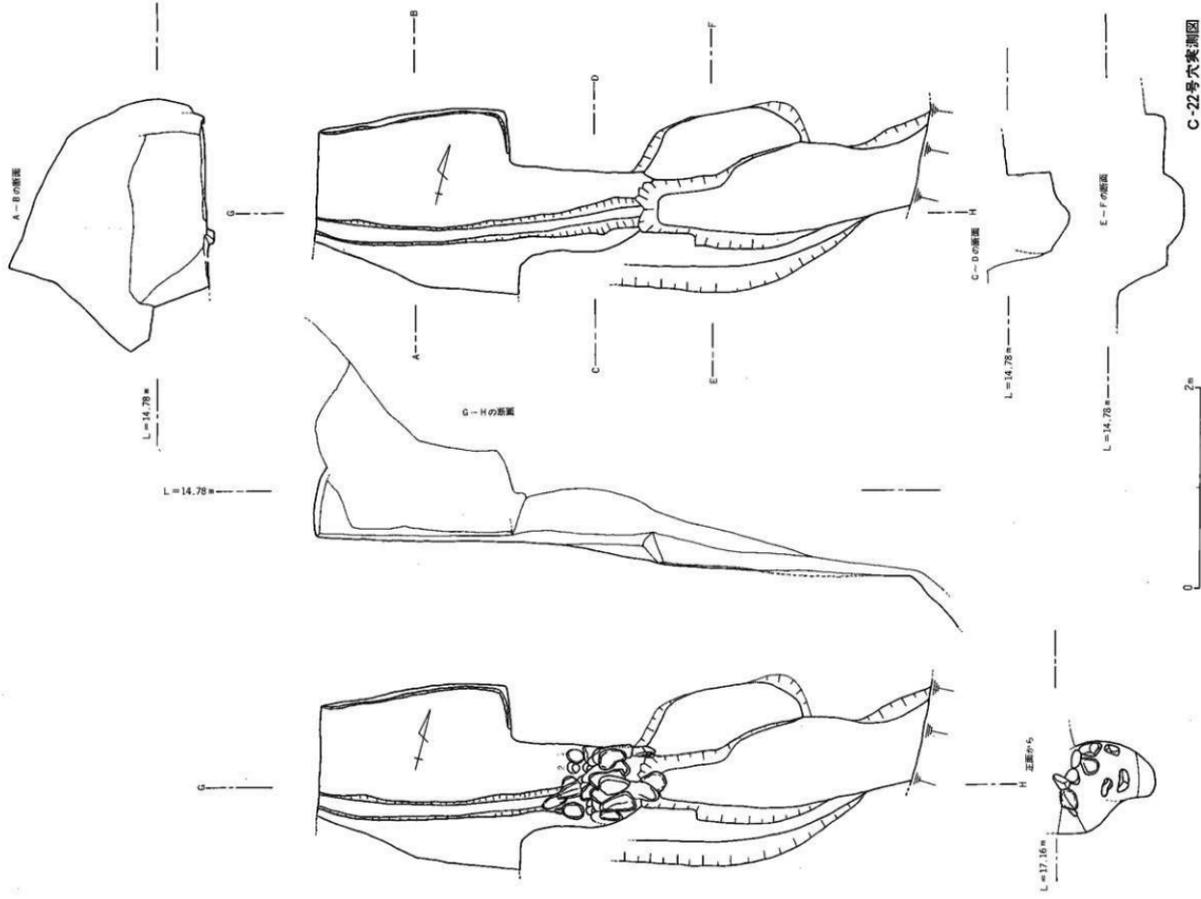
1 墓石の近くから出土した土器



2 地山がくずれてくるので発掘調査を途中でやめたC-22号穴  
(前庭から羨道と玄室を見る)



3 右からC-17号穴、C-19号穴、C-23号穴。  
そして左はしがC-22号穴。



C-22号式家洲図

### 遺物出土位置

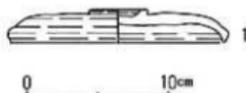
女 室	なし
羨 道	杯蓋1個、杯身1個
前 庭	なし
その他	

### 築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期 (7世紀末)	須恵器型式	N期 (F)	追葬有無	不 明	人骨有無	無
備 考	女室と羨道の天井はすべて落盤、玄室の左側半分は地山が次々に崩落するので、発掘を中断する。						



C-22号穴出土遺物



C-22号穴出土遺物実測図

### C-22号穴出土遺物観察表

番 号	取り上 げ番号	器 種	寸 法 (cm)				胎 土	焼成	色 調	備 考	タイプ
			口径	胴 径	底 径	器高					
1	No. 76	杯 蓋	14.8			2.3	密 細砂を含む	良好	黒褐色	外面一回転ナゲ、つまみの周辺部回転ヘラ削り 内面一回転ナゲ 輪状つまみをもつ。口縁端部には「かえり」が つかない。	B F
2	No. 75	杯 身	14.6		8.3	5.2	〃	〃	暗青色	外面一底面ヘラ削り後ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面一底面静止ナゲ、上部回転ナゲ 高台をもつ。	B F

## C-23号穴

C-19号穴の南隣にあります。これも地山がもろいため天井がすべて落ちてしまっていました。前庭も両側の壁がなくなっていました。

しかし幸いなことに玄室内は盗掘された形跡がなく、そのままの姿を見せてくれました。特に右袖に3個つないだ形でおかれた蓋环など副葬品の土器類の並べ方はどんな意味を持つのか興味をそそります。

土器型式はNEがほとんどで、NFの蓋环が1個あります。このFタイプの蓋环は埋葬の際の副葬品ではなく、Eタイプの埋葬以後、子孫が改めて扉石をはずして中に入り、お供えしたものだ、という見方もできそうです。しかし、扉石がしっかりとした状態になっていますし、南隣のC-22号穴の場合と照らし合わせると、どうもこの「子孫のお供え説」は成り立たないようです。

今のところ、N期Eの時期（7世紀後半）に築造し、N期Fの時期（7世紀末）に追葬したというように考えます。

C-23号穴観察表

(単位：m)

玄室	標高 (床面)	平均 15.00	奥行	2.10	奥幅	1.80	前幅	2.28	最大幅	2.44	高さ	不明
	平面形	やや丸味をおびた台形			天井 の形態	不明			型式	不明		
	埋葬 施設	左側	溝で仕切られた低い 棺台状		右側	溝で仕切られた低い 棺台状			奥	不明		
羨道	長さ	1.10	奥幅	0.32	前幅	0.30	高さ	不明		横断面の形	底面はじ字形	
閉塞施設	石材	自然石18個（16個が海石、2個が地川石）を積み上げている。								礎込有無	不明	
前庭部	長さ	3.30				幅	0.60					
排水溝	玄室の壁ぎわすべてと中心線上。羨道には続かない。											
その他	玄室床面より羨道床面の方がわずかに高い。羨門と前庭の間に段差がつく。											

### 遺物出土位置

玄室	環蓋9個、坏身3個、碗1個、甕2個、甕1個、横瓶1個
羨道	
前庭	
その他	玄室内は全く荒らされていない。



1 びんしつ 支室から見たとびりいし 屏石 (上の方の石はなくなっている)



2 びんしつない C-23号穴の支室内の状況



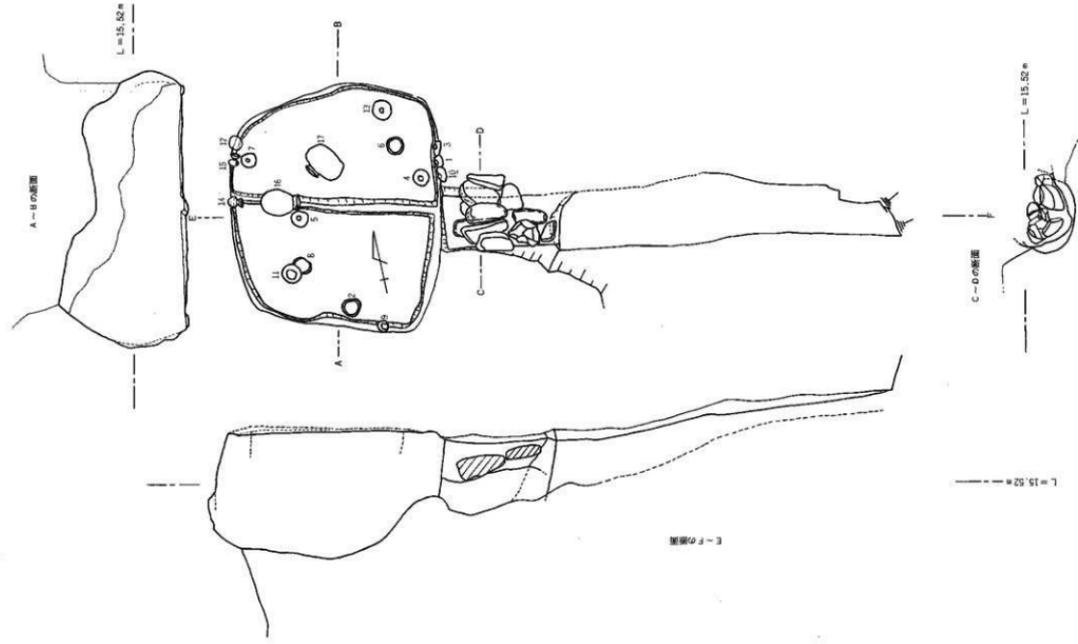
3 どま 土器の出土状況

### 築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期 (7世紀後半)	須恵器型式	V期 (E・F)	追葬有無	有	人骨有無	無
備考	玄室へ羨道の天井がすべて落盤。前庭は側壁の柱とんどもなくなり基底落しか残っていない。						

### C-23号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	口径	器高					
1	№ 92	杯蓋	17.4			4.3	密 細砂を含む	良好	黄灰色	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部および周辺部は回転ナゲ削り、口縁部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N R
2	№ 78	"	16.4			3.0	"	"	"	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部および周辺部は回転ナゲ削り、口縁部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N E
3	№ 93	"	16.3			3.0	"	"	淡灰色	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部以下回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N R
4	№ 90	"	16.1			3.1	"	"	"	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はへら切り後ナゲ調整、天井部および周辺部は回転ナゲ削り、口縁部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N E
5	№ 81	"	15.8			2.8	"	"	灰色	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部および周辺部は回転ナゲ削り、口縁部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N E
6	№ 89	"	16.0			2.5	"	"	黄灰色	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部および周辺部は回転ナゲ削り、口縁部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N E
7	№ 85	"	14.5			2.9	"	"	緑青色	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部回転ナゲ削り、下部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N E
8	№ 80	杯蓋	15.3			3.0	密 やや大粒な砂を含む	"	"	輪状つまみと口縁端部内面の「かえり」をもつ外周つまみの内側はナゲ調整、天井部回転ナゲ削り、下部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N E
9	№ 77	"	17.6			2.9	密 細砂を含む	"	黄灰色	輪状つまみをもつ、口縁端部内面の「かえり」はない。外周つまみの内側はナゲ調整、天井部回転ナゲ削り、口縁部回転ナゲ内面-天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	N F
10	№ 91	杯身	14.6			8.1	4.5	"	外 胎 黄 内 黄 灰 色	高台をもつ。高台の内側外面にへら記号「X」がある。外周-高台の内側へら切り後、ナゲ調整、体部回転ナゲ内面-底部静止ナゲ、上部回転ナゲ	N E
11	№ 79	"	15.8			9.0	4.6	"	"	高台をもつ。高台の内側外面にへら記号、外周-高台の内側へら切り後、ナゲ調整、上部回転ナゲ内面-底部静止ナゲ、上部回転ナゲ	N E

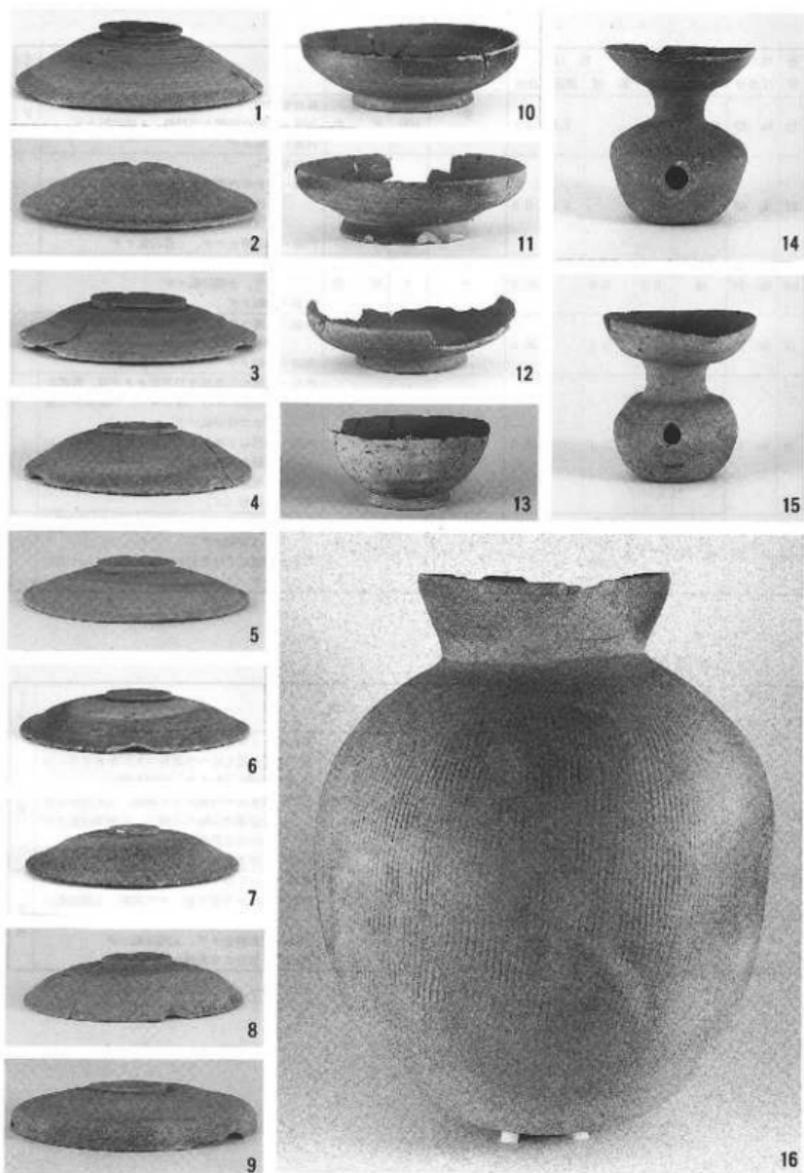


C-23号穴鏡面図

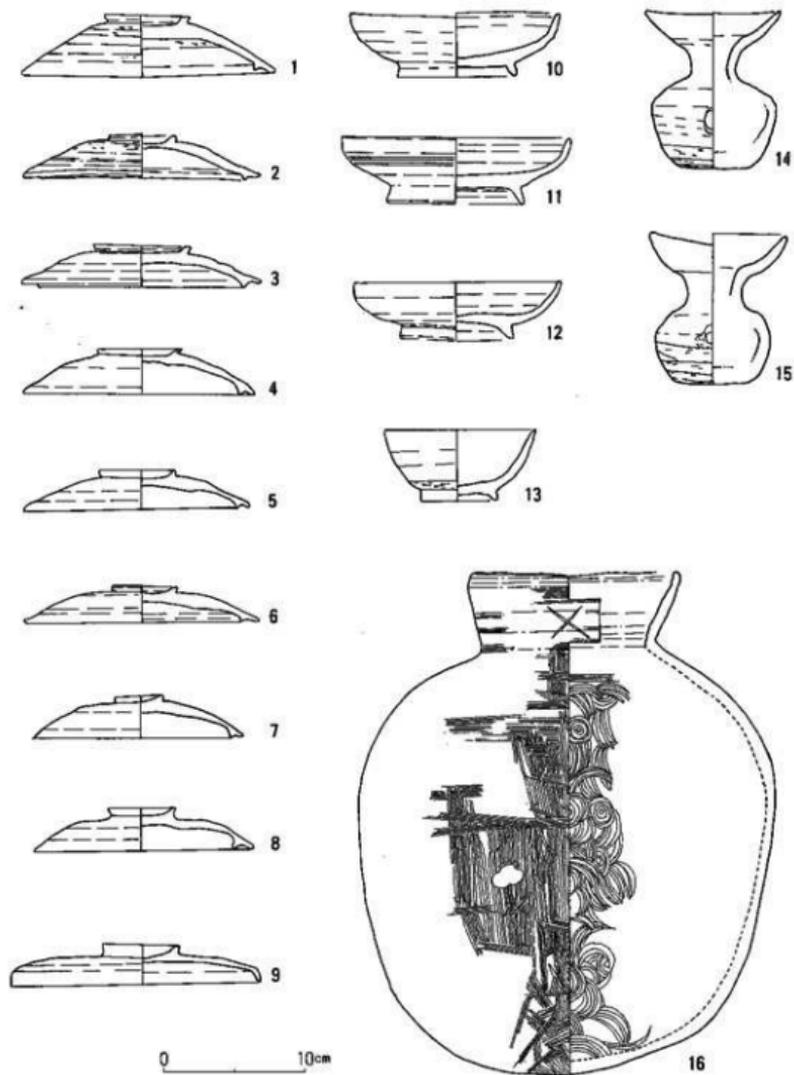
番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
12	No. 87	坏身	14.2		7.6	4.1	密 細砂を含む	良好	灰 色	高台をもつ。 外面—高台の内側ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—回転ナゲ	B B
13	No. 88	筒	10.5		5.2	5.0	"	"	淡黄灰色	高台をもつ。 外面—高台の内側はナゲ調整、底部から胴部にかけてはヘラ切り後、回転ヘラ削り、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ	
14	No. 84	罐	9.3	8.8		10.9	"	"	灰 色	外面—底部ヘラ切り後、底部から胴部回転ヘラ削り、上部回転ナゲ 内面—回転ナゲ	
15	No. 85	壺	9.4	5.1		10.6	"	"	"	外面—底部ヘラ切り後、胴部にかけて回転ヘラ削り、上部回転ナゲ 内面—回転ナゲ	
16	No. 82	甕	14.8	29.1		35.2	"	"	"	外面—頸部から底部まで平行タタキ目、頸部から胴部にかけてはカキ目、口縁部から頸部までは回転ナゲ 内面—頸部以下底部まで青海波文タタキ目、口縁部から頸部までは回転ナゲ 口縁部から胴部にかけて部分的に自然釉。頸部外面にヘラ記号「×」	
17	No. 83	横 瓶	11.9	(長径) 40.2 (短径) 23.5		28.5	"	"	"	外面—頸部から底部まで平行タタキ目、頸部以上は回転ナゲ 内面—頸部以下は青海波文タタキ、以上は回転ナゲ	

### トンレチ発掘り作業中の出土土器

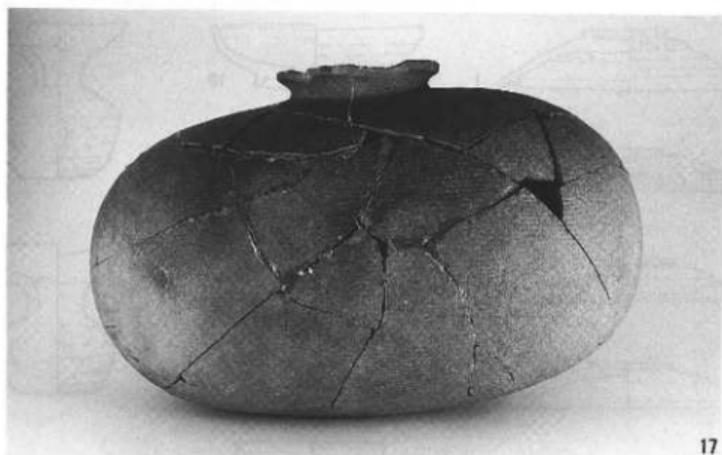
番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
1		坏 壺	14.0			2.8	密	良好	黄 灰 色	第14トンレチから出土。輪状つまみをもつ。外面のつまみ近くにヘラ記号「×」を有する。口縁部内面に「かえり」はつかない。 外面—つまみの内側はナゲ調整、天井部および周辺部は回転ヘラ削り、口縁部回転ナゲ若干の自然釉付着 内面—天井部静止ナゲ、下部回転ナゲ	B F
2		坏 身	12.9	(受部) 11.0		3.8	"	"	"	第21トンレチから出土 外面—底部ヘラ切り後、ナゲ調整、上部回転ナゲ 内面—底部静止ナゲ、上部回転ナゲ 外面の一部分に自然釉付着	B A



C-23号穴出土遺物 No.1

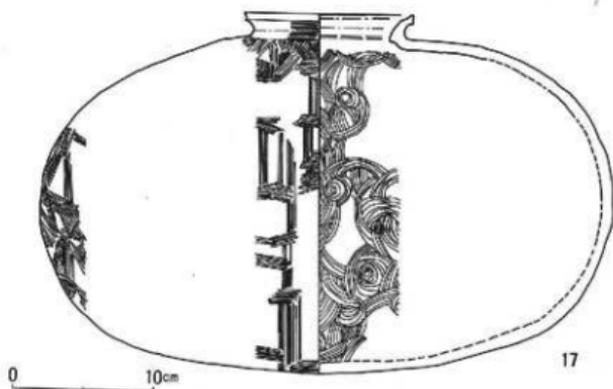


C-23号穴出土遺物実測図 No.1



17

C-23号穴出土遺物 No.2



C-23号穴出土遺物実測図 No.2



トレンチ荒掘り作業中の出土土器



0 10cm

トレンチ荒掘り作業中の出土土器実測図

## 横穴古墳

大芦小六年 高井美香

今日(十一月一日)二時間目のと中から、小具の宮尾横穴群を見に行きました。昨年の見学の時、よくわからなかったけど、今度はもう社会科で古墳について習ったから、よくわかると思います。

昨年見たのちがって、きちんと天井もついていて、お墓だということがよく分かりました。説明によると、この山は横穴だらけになっているそうです。数は五十個以上あるそうです。すごいなあ、と思いました。こんなにたくさんあるということは、そのころこの大芦にたくさん有力者がいたということです。もし、これで島根町の歴史が変わったらすごいと思います。

墓に入る時、イヤリングをしていたそうです。しかもそのイヤリングが金メッキだなんて、これまたすごいと思いました。広志君は、

「おかまだなあ。」

と言っていました。男の人までするなんて思いもありませんでした。

横穴の中に入ってみると、けっこう広くて石のまわりにもありました。横の方に、小さな子供の入る穴もはってあり、まさみ君がその中へ入ってみました。

私は横穴に入ったたりさわたりできてすごうれしかったです。めったにできないことです。こういうことができるのも、これが最初で最後かもしれせん。だからとてもよい経験になりました。社会科の勉強にも役立ちました。

十一月十一日の農業祭では、横穴から出てきた品物を展示されるそうですが、私はおじさんの結こん式があって見に行けません。とても残念です。

## 前年度第一次調査のあらまし

前回の第一次調査（平成元年度）は今回の調査区の北西隣り約10メートル×約30メートルの範囲で行われました。宮尾の丘陵が海の方に突き出た辺りから西側の一帯です。

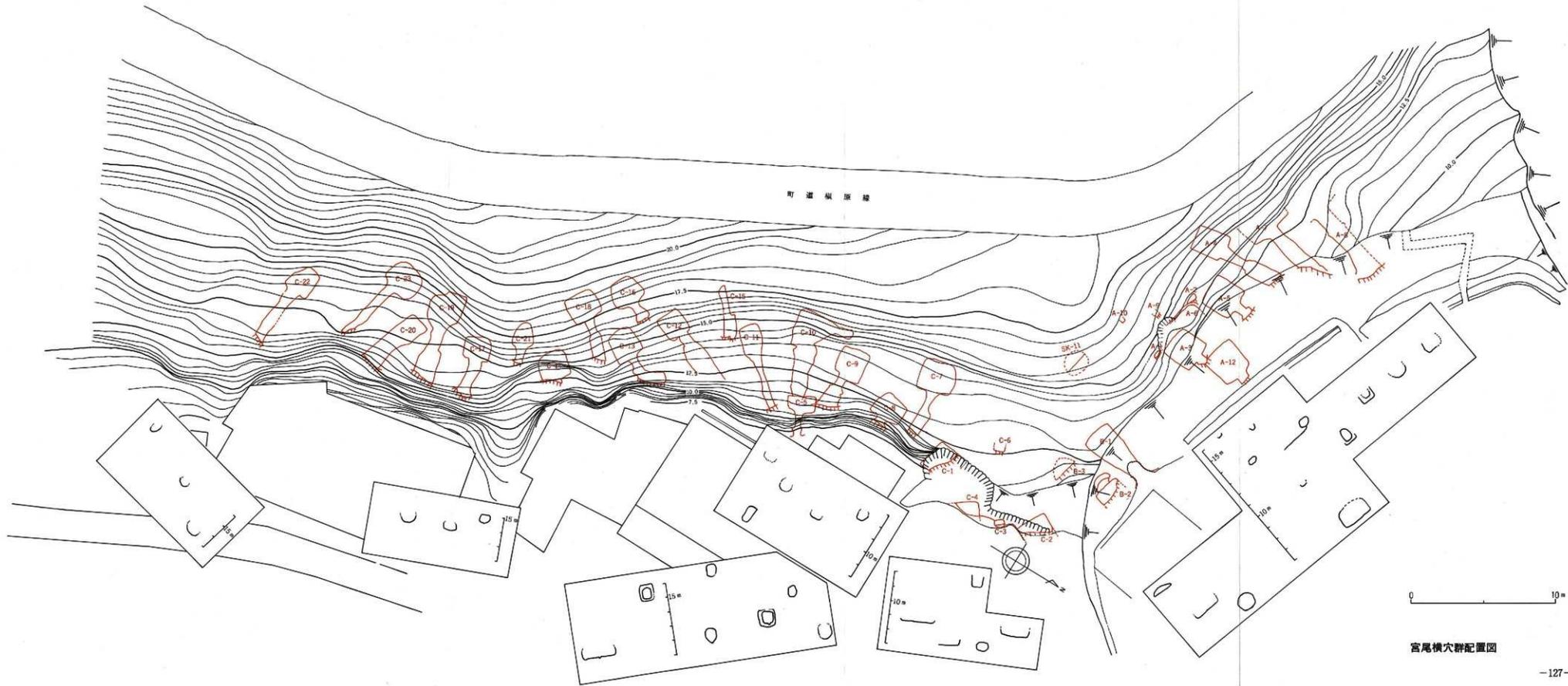
全部で20穴の横穴が見つかりました。残念なことに、ほとんどが天井部落盤の横穴であったり、後世、畑や宅地造成のため削りとられたり、中が荒らされたり、二次的な加工をされたものもけっこうありました。

出てきた土器からはっきりとした時期がわかるのは6穴です。Ⅲ期B（6世紀後半）から始まるのが3穴、Ⅳ期A（7世紀前半）からが3穴です。7世紀半ば以降に築造されたものは1つもありません。この点が今回の調査区と大きなちがいです。玄室の天井の形態がわかるのは、3穴しかありません。今回同様のテント形と便化家形です。

羨門の閉塞方法は、今回の調査区のはとんどの穴で見られた「自然石積み上げ方式」が、4穴にありました。玄室内の「須恵器屍床」は1例もなく、床面に板状石と玉砂利を敷いたのが1穴、扁平な自然石を並べたのが1穴、そして玉砂利だけを敷きつめたのが1穴でした。次に特徴的な点は、山の斜面のかなり低い所まで、今の宅地と平行するレベルにまで横穴が掘られており、横穴群全体が少くとも4段に構成されていることです。

最も注目すべき点は、今回の調査区からは出土しなかった大刀、鉄鎌（矢じり）や玉類を副葬しているのが5穴もあったことです。土器のみ副葬する横穴と大刀、玉類まで供えている横穴とでは当然被葬者間に格差があったはずですが、後者の横穴群全体の中で占める地位はハイクラスと言えます。

いずれにしても第1次と第2次の2回の発掘で37穴も確認できた意義は大きいです。これだけ多くの横穴を調査した例はごく稀です。今後調査結果を総合的に検討していく必要があります。



宮尾横穴群配置図



土器型式からみた宮尾横穴群の築造時期と使用(追葬)時期

## 未調査区域について

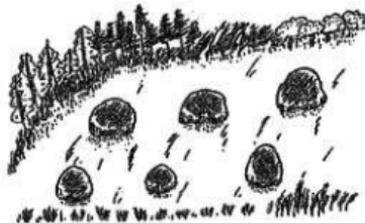
第1次と第2次の発掘調査の結果37穴の横穴が見つかりました。しかし、これは宮尾横穴群のすべての横穴ではありません。本当はもっとたくさんの横穴が山全体に掘られていると思います。例えば、まず、山すその辺り。ちょうど今の宅地や畑と重なる低い所にも元々は「数珠つなぎ」に存在していたでしょう。次に斜面の上の方、例えば町道植原線に近い標高15メートル～20メートル沿いの広範囲は、安全上の配慮から全く調査のメスを入れておりません。ここに相当数埋もれていることが考えられます。そして、C-22号穴より南の現在竹やぶとなっている所（谷の奥部）も確実にあります。何段も階段状になっている斜面が表面観察できます。この範囲でもかなりの数になるでしょう。

したがって、宮尾横穴群は、丘陵斜面の等高線に沿って少くとも5段平行に合計50穴以上群集している非常に大規模なものになります。

考古学豆知識

### №6 —— 横穴は住居にあらず ——

島根県内ほとんどの市町村にこの横穴はある。山の斜面に対して水平方向に直接掘り、くぼめられた大きな穴である。穴の形は家形あるいはドーム形。床面の広さは二畳余り。中央部での高さは1.5～2メートル。あたかも独身者向きの住居の感じ。だから「横穴式住居」と呼び、その昔人間が住んでいたと考えるのも無理ない。だが、本当は1400～1500年前のお墓なのである。



今でいう集団墓地に当たり、一ヶ所に数穴、数十穴も作った。そして穴の入り口に扉をすることによって何回も使用した。一穴から十数体分の人骨発見例もある。

# V. ま と め

前回の平成元年度第1次調査と今回の2年度第2次調査の結果、次のようなことがわかりました。

## 宮尾横穴群一覽

番号	横穴の形態	主な出土遺物	時期	備考
A-1	長楕円形プラン	なし	不明	小児用か。
A-2	長楕円形プラン	なし	不明	小児用か。A-4号穴と一体のものか。
A-3	正方形に近いプラン テント形・妻入り	須恵器、土師器、 刀子、鉄鏝、耳環	Ⅱ期（6世紀後半） Ⅲ期（7世紀前半）	玄室内に板状石と玉砂利を敷く。 羨道部に閉塞用の石積み。 羨道部床の横断面はU字形
A-4	長方形プラン テント形（推定）・ 妻入り	須恵器、鉄鏝、 耳環	Ⅳ期（7世紀前半）	羨道部に閉塞用の石積み。 羨道部の横断面は楕円形か。
A-5	正方形プラン テント形・妻入り	須恵器、刀子、 耳環、勾玉	Ⅱ期（6世紀後半） Ⅳ期（7世紀前半）	羨道部に閉塞用石積み。 羨道部の横断面は扇卵形。
A-6	奥壁のみ	なし	Ⅱ期？ （6世紀後半？）	横穴でない可能性もある。A-2号穴 と一体のものか。
A-7	正方形プラン（推定） テント形（推定）・ 妻入り（推定）	須恵器、大刀	Ⅳ期 （7世紀前半と後半）	羨道部に閉塞用石積み。 羨道部床の横断面はU字形。
A-8	不明	須恵器片	不明	前庭から羨道部にかけてのみ発掘。
A-9	不明	なし	不明	前庭あるいは羨道部の断面を工事に 発見した。土壌または構状遺構の可能 性もある。
A-10	不明	なし	不明	
A-12	正方形プラン 丸天井（推定）・妻 入り（推定）	なし	不明	工事中発見。以前開口していたが後に 埋めたという。
B-1	長方形プラン 平天井（？） 妻入り（？）	なし	不明	以前から開口。物置として利用してい た。後世の加工痕もある。
B-2	正方形～長方形プラン （推定）	なし	不明	
B-3	不明	なし	不明	工事中発見。
C-1	歪みのある正方形 プラン（推定）	須恵器、刀子、 耳環、歯？、木質	Ⅱ期（6世紀後半） Ⅳ期（7世紀前半と 後半）	玄室に扁平な自然石を敷いている。
C-2	台形プラン 優化家形	須恵器、大刀、 刀子、鉄鏝、耳環 勾玉、切子玉	Ⅱ期（6世紀後半） Ⅳ期（7世紀前半）	玄室に玉砂利を敷いている。
C-3	長楕円形プラン	なし	不明	小児用か。

第一調査区 心平墓	C-4	正方形プラン (推定)	なし	不明	
	C-5	長方形プラン 平天井・平入り	なし	不明	工事中発見。羨道部または前庭部の断面のみを検出。
	C-6	不明	なし	不明	工事中発見。羨道部または前庭部の断面のみを検出。
	C-7	正方形プラン 便化家形・妻入り	須恵器	N期 (7世紀前半と後半)	羨道部に閉塞用石積み。 羨道部の横断面は鳥居形。
	C-8	長方形プラン 便化家形・平入り	須恵器	旧期(6世紀後半) N期(7世紀前半)	羨道部に閉塞用石積み(推定) 羨道の底面はU字形
	C-9	長方形プラン 便化家形・妻入り	須恵器、土師器、 耳環	N期(7世紀前半)	羨道部に閉塞用石積み 羨道部の横断面は鳥居形
	C-10	長方形プラン テント形・妻入り	須恵器	N期 (7世紀前半と後半)	羨道部に閉塞用石積み
	C-11	長方形プラン? 丸天井・妻入り	須恵器、土師器	N期 (7世紀前半と後半)	羨道部に閉塞用石積み 羨道部の横断面は楕円形
	C-12	長方形プラン テント形・妻入り	須恵器、土師器、 耳環	N期 (7世紀前半～半ば)	女室左側に須恵器甕床 羨道部に閉塞用石積み 羨道部の横断面は円形
	C-13	長方形に近いプラン 便化家形・妻入り	須恵器、耳環	N期 (7世紀前半)	女室の左右に須恵器甕床 羨道部に閉塞用石積み 羨道部の横断面は円形 異形の前庭状テラスを有する。
	C-14	丸味のある正方形プラン、 便化家形	須恵器片	N期 (7世紀前半)	
	C-15	不定形	なし	不明	小児用か。あるいは築造途中でやめたものか。羨道部の横断面はやや丸味をおびた方形
	C-16	台形プラン 家形・妻入四柱式	須恵器	N期 (7世紀後半)	女室左側に扁平な石を敷いた石床。 羨道部に閉塞用石積み 羨道部の横断面は、やや丸味をおびた方形
	C-17	正方形プラン 便化家形	土師器、須恵器、 刀子	N期 (7世紀後半)	羨道部に閉塞用石積み 羨道の底面はU字形に近い。
	C-18	正方形プラン テント形・妻入り	須恵器、耳環	N期 (7世紀前半と後半)	女室の左右に須恵器甕床 羨道部に閉塞用石積み 羨道の横断面は鳥居形
	C-19	いびつな長方形プラン 便化家形・妻入り	須恵器	N期 (7世紀前半)	羨道部に閉塞用石積み 羨道の底面はU字形
	C-20	長方形プラン・片袖形 便化家形・妻入り	須恵器	不明	羨道部に閉塞用石積み
	C-21	不定形	なし	不明	羨道部に閉塞用石積み 羨道の横断面は、丸味をおびた方形
	C-22	台形(?)プラン	須恵器	N期 (7世紀末)	羨道部に閉塞用石積み 羨道の底面はU字形
	C-23	やや丸味をおびた台形プラン	須恵器	N期(7世紀後半～ 7世紀末)	羨道部に閉塞用石積み 羨道の底面はU字形

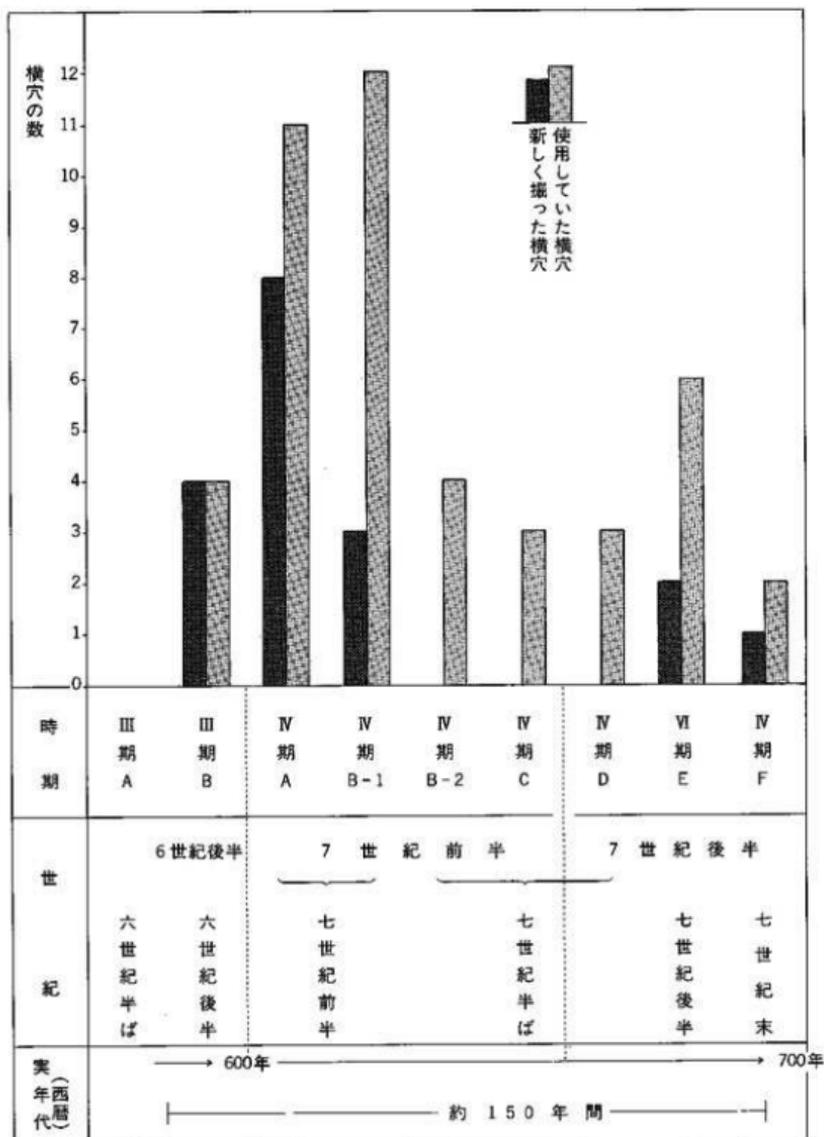
1. 2度の発掘調査により合計37穴を確認しました。県内でも、これだけ多数の横穴の調査例は珍しいです。未調査の範囲を含めると、総数は少くとも50穴以上になります。今のところ島根半島で第一級の横穴群です。県下でも指折りの最大クラスであることはまちがいありません。一つの丘陵にこれほど密集していたとは、正に驚くべき事実でした。

横穴のつくられた時期と使用された期間

	Ⅲ期 B	Ⅳ期 A	Ⅳ期 B-1	Ⅳ期 B-2	Ⅳ期 C	Ⅳ期 D	Ⅳ期 E	Ⅳ期 F
A-3号穴(テント形)	■	■						
A-4号穴(テント形)		■						
A-5号穴(テント形)		■	■					
A-7号穴(テント形)		■	■				■	
SK XI							■	
C-1号穴	■	■				■		
C-2号穴(優化家形)	■	■				■		
C-7号穴(優化家形)		■				■		
C-8号穴(優化家形)	■	■	■					
C-9号穴(優化家形)		■	■	■				
C-10号穴(テント形)		■	■				■	
C-11号穴(丸天井)		■	■	■	■	■		
C-12号穴(テント形)		■	■		■			
C-13号穴(優化家形)		■	■					
C-14号穴(優化家形)		■	■					
C-15号穴(不定形)								
C-16号穴(家形)							■	
C-17号穴(優化家形)							■	
C-18号穴(テント形)		■	■	■	■		■	
C-19号穴(優化家形)		■	■					
C-20号穴(優化家形)								
C-21号穴(不定形)								
C-22号穴								■
C-23号穴							■	■

■ 築造された(使われ始めた)時期  
 ■ 使用されていた(あるいは追葬)時期

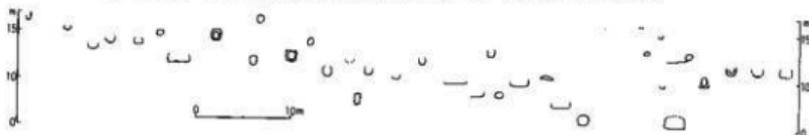
横穴の時期ごとにつくられた数



- 横穴は6世紀の半ばごろに(Ⅲ期Aの時期)出雲地方の平野部に登場しますが、宮尾の場合、少し遅れて6世紀の後半(Ⅲ期Bの時期)にスタートします。つまり出雲地方で最も横穴が盛んにつくられるようになってから、開始しています。一方、終わりの時期は、平野部と同時です。7世紀後半に宮尾横穴群も終了します。
- 宮尾横穴群は、まず丘陵はぼ中央の突端の山すそ付近から横穴の築造が始まり(Ⅲ期B、6世紀後半)、第2段階では、その周囲にひろがり(N期、7世紀前半)やがて時期が下るにしたがって(N期、7世紀後半)谷の奥へ向かって新しい穴を掘っていきます。
- グラフからもわかるように、6世紀後半から7世期末までの約150年間、横穴は使用されますが、その使われ方には変動があります。

つまり、7世紀前半に最も盛んに埋葬されていたのが、7世紀半ばごろになると急に減り、7世紀後半になると多少増えます。これは一体なぜでしょうか。

- 50穴以上の横穴は、丘陵斜面の等高線に沿って「数珠つなぎ」のように、高い所から低い所まで少くとも5段くらいに配列されました。最も高い段は今の町道近くのレベルで、最も低い段は現在宅地や畑地になっている高さでしょう。



等高線ぞいに並んだ横穴群配置図

- 横穴の玄室の形態は、全体的に床面の平面形が長方形ないし正方形というかっちりした方形プランで、しかも排水溝まで備えているのに、整った正しい家形になっていません。天井と壁の境目がきちっとしてなくて便化家形やテント形が主流になっています。この点が大きな特徴です。これは松江市の北部や島根半島の横穴に多く見られる傾向です。(例えば松江市持田町や八束郡鹿島町が同じ傾向です。なおテント形は大原郡・仁多郡など、どちらかという出雲地方でも雲南地方に多いタイプだそうです。)

上記2と合わせて考えると、当時、この地域は出雲地方の古墳文化の中心からややはずれているというイメージがわかります。

- 横穴の羨道の横断面の形は、ほとんどが楕円形、鶏卵形、円形です。そして天井部がなくなっている場合は底面がU字形となっています。これも地域性としてとらえることができます。(次ページ「横穴の羨門の正面図・羨門の横断面図」参照)



8. 海岸から持ち運んだ長丸い石を積み上げる羨門の閉塞方法が興味深いです。これもローカル色でしょう。

9. まるでアパートのように何段にも並列した横穴群ですが、大刀や鎌（矢じり）とか玉など特に貴重品を副葬しているのは、丘陵中央突出部から西側にかけての区域で、しかも6世紀後半から7世紀前半までに築造された横穴に集中しています。中央部以南の谷奥部の区域にはありません。

副葬品の優劣は被葬者間の身分や地位の上下をそれとなく示しているようです。ふつう横穴の被葬者は中流ないしそれ以上の有力者層と言われていますが、その中

でも上下関係があったようです。

10. 漁業を想像させる副製品は皆無でした。しかし、玄室の床面に敷きつめた石や浜砂利そして羨門の扉石に用いた大量の石など、どれもこれも近くの海岸から容易に運べるものばかりで、「浜辺の古墳」ならではこそその方法だと感心させられました。
11. 出土した大量の須恵器は近くに焼かれた可能性もありますが、今のところでは松江市朝酌、大井、人海崎一帯の窯で生産されたのが移入された、と考えます。
12. なぜ横穴群を宮尾の丘陵につくったのでしょうか。それは石英安山岩質凝灰岩という適度にやわらかくてそしてくずれにくい性質の地山に着目したからでしょう。不思議なことに大芦地区の中でもここ宮尾の斜面だけが局部的にこの岩質なのです。当時の人々はこの点をよく知っていました。
13. 横穴群があるということは、近くに集落があったことを示しています。それは、宮尾の真下にある今の小具の集落程度よりもっと広い範囲に、「むら」が形成されていたことをうかがわせます。島根半島最大の横穴群ですから、すでに周辺には比較的まとまった平野（水田）と天然の良港から得られる経済力を基盤とした相当規模の「むら」が栄えていたことが想像できます。宮尾の横穴は村内の中流ないしそれ以上の有力者およびその家族の墓だったと考えられます。
14. では、宮尾横穴群の被葬者の「むら」は、今の大芦地区（旧大芦村）の範囲だったのか、あるいは東隣りの加賀地区（旧加賀村）あるいは西隣りの鹿島町御津地区（奈良時代には御津も加賀郷に含まれていた）まで拡げて考えた方がいいのか。今の時点では判断できません。ちなみに加賀地区では今のところ石室や墳丘をもつ同時期の古墳はありますが、横穴は見つかっていません。御津には御津貝塚横穴群が知られています。
15. 古墳時代後期（6～7世紀）の多くの古墳は、(1)土まんじゅう形の墳丘を築き、その内部に遺体を納める石棺や石室を設けるものと(2)横穴の2種類があり、ふつう前者の方が後者より上位の被葬者と言われています。実は宮尾横穴群の西方約800メートルの所に樽谷古墳という大芦地区でただ1つの石棺を設けた墳丘の古墳があります。正式な発掘調査を経ているませんが、その時期は後期（6～7世紀）と考えられ、宮尾と何ほどか重なっています。今後の調査を待たねばなりません。樽谷古墳の人物は「むら」のトップ、宮尾はそれより下のクラスの有力者層およびその家族の墓と考えることもできます。
16. いずれにしても、宮尾横穴群の調査結果が、島根町はもとより島根半島全域の古代史解明に大きな一石を投じたことは否定できません。そればかりか、当時の日本の一般的な村落社会の構造を考えていく上での貴重な資料になりました。今後、この

方面の研究上必ず役立ちます。私達のほんの身近な所に、これだけ価値のあるものが眠っていたのです。

#### 参考文献

- 山本 清「出雲と島根町の古墳のあらまし」(『島根町誌』1987年)  
門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」(『古文化談叢』1980年)  
山本 清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』1951年)  
山本 清「横穴の型式と時期について」(『山陰古墳文化の研究』1951年)  
山本 清「横穴被葬者の地位をめぐって」(『島根考古学会誌第1集』1984年)  
松本岩雄「原始・古代の美保関」(『美保関町誌』1986年)  
山本 清『山陰の古代文化』(六興出版1989年)  
島根町教育委員会『宮尾横穴群』1990年

なお、本報告書作成にあたって西尾克己、広江耕史両氏のご教示を得ました。また、「考古学豆知識」の中のさし絵には、高橋秀子氏の作品と県教育委員会文化課発行資料の中から転用したものがああります。



調査終了後の慰霊祭 (C-12号穴の前で)  
〈地元、小具地区の主催で行われました。〉

---

宮尾横穴群

第2集

—第2次調査報告書—

平成4年3月

発行 島根町教育委員会

〒690-04

島根県八束郡島根町大字加賀1455

TEL (0852)85-3252

印刷 ㈱高浜印刷所

〒690 島根県松江市北瀬町8

---